＜ 令和 6 年能登半島地震、七尾と穴水の被災状況(1/07) ＞

24.01.16 togashi

2024 年正月(1/01)に生起した令和 6 年能登半島地震は、ご承知のように阪神淡路や熊本地震を上回る大規模な地震で、能登半島域は大変な被害に見舞われた。まずは地震で被災された方々にお見舞い申し上げます。

当該地震は富山でも近年初めての震度 5 強の大揺れであったが、地元県東部域では震度 5 弱であり、周辺域には何の変状もなく、実は安心していただけに、地震発生以降、日がたつにつれ、被害の激甚さが明らかになってからは、あらためてことの重要さを実感した次第である。

それで急遽 1/7 に、地震仲間(建築家の坂井修一氏)とともに、発災 1 週間弱後の 1/07 に、高岡から伏木や氷見を通り、七尾と穴水における被害様相を視察した。県東部から氷見までは円滑走行であったが、石川県に入ってからは道路が込みだし、七尾を越えてからは迂回路渋滞走行であったものの何とか穴水にたどり着いた。時間も押していたので、限られた場所での被害状況を目視するだけであったので、七尾市内各地や肝心の能登町、輪島市、珠洲市は後日として、その場を引き上げた。

ここでは、目に付いたもののみの被害状況を記すことにする。なお、氷見市を含む富山県内の被害状況については、1/10 の視察記を参照されたい。

能登半島全図　　石川県全図 HP より引用

[1]　七尾市中島；　市指定有形文化財となっている明治の館(室木家住宅)の入り口部にある看板棟の崩壊があった。建物内部も被害があることが想像されるが、見ていない。館周辺の建物では、蔵の石積みの崩壊とか、2 階建て建物の 1 階部傾斜の被害があった。この他、当該地の地盤は砂地ゆえに、道路面のキレツや沈下があった。

［２］　穴水町曽福；　小舟が係留できる小さな湊に面した建物が一階部の崩壊により玉突き状態で倒壊していた。

［３］　穴水町中心地；　町の中心域では、どこも路面が縦横断に割れていた。傾斜した建物が多かった。わずかの傾斜でも窓が開閉不能の被害であった。地域内をくまなく見た訳ではないので何とも言えないが、液状化の被害はあったと思われる。

［４］　七尾市松百(七尾病院前)；
　JR 七尾線の特急列車が回送中に地震により緊急停車。場所は和倉温泉と七尾の間である。

▲今後にむけての関心点

［１］　珠洲や輪島における被害について

(1)　珠洲では､2023.5.5 能登半島地震による珠洲中心地における局所的な被害があったばかりであり、その後に補修の検討されていたいくつかの建物の崩壊模様が気になっている。（ほとんど倒壊したと聞いている）　→　度重なる地震でダメージが蓄積されたこともあろう。

(2)　輪島では、2007.3.25 能登半島地震にて輪島での被害があり、学術団体により市街地全域で建物悉皆調査が行われた。当時の記憶を思い出しながら、激甚被害を捉えたい。

→　新耐震で設計した建物の崩壊も多かったと聞く。2007 年のデータが役立てばいいが。

(3)　半島西部域においては、2007 年の地震に加え 1993.2.07 能登半島沖地震の時に、寺社建築を中心にみた。特に注目したいのは、2007 年地震で大被害を被むり、2021 年に完全復興した総持寺。今回の地震で周辺の町と共に再興が難しいのではと思われる大被害であったという。気になる限りである。

→　文化財の耐震はより今日的技術の導入が必要といえる。

［２］　震度階について

1 月 1 日 23 時 05 分に発生の地震について、気象庁はすぐに最大震度階 7 の地震と発表した。その後、震度階 3 と訂正した。なぜそのようなことが起きたのか。計測震度の算定において、種々フイルターを掛けて波形再生しているところに、いまひとつ甘い評価があったのではなかろうか。最大加速度が大きくてもさほどに感じられないこともある。本来は最大速度にすべきと思うが、速度の概念には一般にはなじみがないので、やはり加速度の概念の出番なのかもしれない。

［３］　新耐震設計法でいいのかどうかについては、熊本地震 2016 の時に益城町の木造建築の被害分析で指摘されていた。これについては、当該被害事例ほ、地盤崩壊によるもので純粋に振動で壊れたとは言えないという意見が大勢であった。